

研究者リーダーシップ・プログラム

「第1回 参加者による自己紹介とリーダーシップについて」参加レポート

第1回では、参加者それぞれの自己紹介と、リーダーシップについて講演を通じて、リーダーシップとは何か？という、参加する以前に抱いていた漠然とした問いに対する一つの具体的な答えを示していただいたように思います。

長年の経験と実績に裏打ちされた組織・社会の制度や運営の考え方には、人を動かし、同時に、人から助けられる強い力を感じました。構造や認識の偏りを意識して、強みを活かし、弱みを補い合う姿勢が、結果として組織を活性化し、大きな成果につながるのだと理解しました。リーダーシップを個人の資質として高めていくとともに、組織全体を良い方向へ動かす仕組みとして捉え、「個人・組織・社会が win-win の関係に」なるような広い視点を持ちたいと思いました。

全体を通して一貫して根底にあったものは「思いやりと心配り」でした。社会をどう捉えるか、リーダーとしてどのような心構えを持つか、研究をどう進め、どう伝えるか等、話題は多岐にわたりましたが、そのいずれにもこの姿勢が中心にありました。個々の課題や技術ではなく、態度が、その先のリーダーとしての具体的な行動に共通している点に、説得力があったように思います。研究活動を続けていく上では、大小さまざまな研究グループを組織し運営していく必要があります。メンバー全員が役割を遂行する以前に、他者に対するリスペクトを共通して持つことで、初めて、同じ方向を向いて進むことができるのだと思います。さまざまな目標に向かって組織されるチームでは、毎回同じ方法論でまとまるわけではないので、組織を運営する力量は意識して培うほかありませんが、これがひいては研究者としての力量につながるのだと感じました。

さらに、こうした心構えに加えて、リーダーシップには気合いと体力が必要であることも感じました。とりわけ、知的な探求を続ける研究者の組織を率いるリーダーには、相応の熱量が求められます。これらは能力というよりも、日々の状態に近いものだと思います。であればこそ、一時的に高めることなく、どう維持するかが実際の課題になります。今後の回を通じて、自分の場合に何がその熱量を支えるのか、そして研究グループの運営にどう結び付けられるのかを、具体的に考えていきたいと思っています。

第1回のセミナーを通して顧みることができた、自分自身の強みや弱み（の強み）を理解しつつ、組織において自分に無い視点を知り、取り入れながら、「良いリーダー」になれるよう、日々の生活を送りたいと思います。特に、楽観的である自覚はあるので、これがチームを良い方向へ導くように意識しながら、さまざまなことに取り組んでいきたいと思っています。

(岩波翔也・名古屋大学大学院理学研究科 講師)